

中学生の両親の受容的養育態度

— その規定因およびエリクソンの成人期課題との関連 —

齊藤麻子

I. 問題と目的

親から受容されることは、子どもが成長する上で大切な経験の一つであり、これまでの親子関係研究においても、親から受容されることが子どもに多くポジティブな影響を及ぼすことが確かめられている。では、子どもに受容になれる親とはどのような親なのであるのか、と親の側に焦点を当てたのが本研究である。

1. 受容的養育態度の規定因

親の受容的養育態度の個人差は、どのような要因により規定されているのだろうか。Belsky (1984) は、親の養育態度の規定因を大きく、(1)親の個人的な心理的リソース、(2)親子を取り巻く社会的文脈、(3)子どもの特徴の3つに分類している。まず(1)に関しては、Belsky (1984) が、親の個人的な特性は、少なくとも部分的にはその人の生育歴の産物であると述べていることから、本研究では生育歴が親の心理的リソースの中核部分を形成すると考え、特に“親の子ども時代の自身の親からの被受容経験”を規定因として取り上げた。子ども時代に親から受容された子どもは、その親の応答性、肯定的態度をモデリングして自分が親となってから子どもに受容的態度を示すと考えられるし、また親から受容された子どもは情緒的に安定し、良好なパーソナリティを身につけるために親となった時に子どもの気持ちを思いやり受容的になれると予想される。また(2)に関しては、愛情を基盤に関係を結んでいて、同一家族内の別のサブシステムを形成する夫婦関係に着目し、特に“配偶者からの被受容経験”を規定因として取り上げた。夫婦関係が親密ならば親は精神的に満たされて子どもに安定して暖かく接することができるであろうし、そもそも夫婦関係の良好な親は他者と情緒的に親密になる能力を備えているので子どもにも暖かく関わることができると予想される。以上を規定因に取り上げたのは、親が子どもに受容的に関わるためには、親自身が周囲から受容され、安定した気持ちで子どもに関わるような環境が必要なのではないかという考えによる。さらに(3)に関しては、“子どもが両親のどちらになつているか”“どちらにより性格が似ているか”という心理的側面を取り上げ、探索的に親の受容的養育態度との関連を調べた。

2. エリクソンの成人期課題との関連

子どもに受容的な親とそうでない親は心理的にどう違っ

ているのだろうか。人は、子どもの誕生以前には、親をはじめとする周囲の保護の中で自分自身の課題にのみ取り組んでいればよかったが、自分が親となることでそれまでと立場が逆転する。親となると子どものために自分の欲求が妨げられたり、自分の生活が制約されたりする面も出てくるが、親は自分のことばかりではなく、子どもも自分の守備範囲の一部として関心の中に含めていなくてはならない。このような問題に近いと思われる内容が Erikson によって理論的に扱われている。Erikson の心理・社会的発達段階において、成人期には「生殖性 対 自己耽溺と停滞」という危機を克服することが課題とされている。生殖性が自己耽溺と停滞を凌駕できると「世話」という協和傾向が現われるが、自己耽溺と停滞が生殖性よりも優勢となると「拒否性—特定の人間を自分の生殖的関心に含めることへの嫌悪」が極端に強くなる。そこで親の関心が自分にばかり向いている状態を自己耽溺とみなすと、この状態では世話をする力が生まれず、子どもを自分の生殖的関心に含めることに嫌悪感が生じるので、子どもに受容的な態度が取れないと予想される。本研究ではエリクソン、E. H. (1977, 1981, 1989) の記述から“自己耽溺”を「愛他行動が取れるほどの余裕がなく、生活において、自分自身のためにしか自らの時間やエネルギーを費やそうと思えない状態」と定義して、親の受容的養育態度との関連を調べた。

ではここから逆に受容的な親について考えると、親が自己耽溺状態でない、つまり自己耽溺と停滞を上回る程度に生殖性が十分に発達していることになる。生殖性は創造性と社会の発展を目指した次世代確立へのコミットメントの2側面を含むといわれているが、本研究では自己耽溺との関連から後者を取り上げて“次世代育成・社会の維持向上へのコミットメント”と名付け、これを「自分の子どもを導いたり、助けたり、教えたりすることを通して次世代育成、ひいては社会の維持と向上をもたらしたいと願い、そのことに気持ちを傾け、自らの時間や労力や思考を惜しげなく費やし、情熱を注いでいること」と定義して、これと親の受容的養育態度との関連も調べた。

II. 方法

対象と方法：公立中学校2校を通して中学生とその両親に質問紙調査を行なったところ、250組（男子115名、女子135名）の有効回答を得た。各学級担任から父母子3名分の質問紙の入った封筒を配布してもらい、それを子どもに各家庭に持ち帰ってもらって、父母用の質問紙を両親に渡してもらった。そして2日以内に再び学校へ持ってきてもらったものを担任により回収してもらった。

内容：①親の受容的養育態度：Shaefer (1965) の CR-PBI を小嶋が和訳したもののうち、Acceptance-Rejection の因子に負荷することが示された尺度を元に作成した15項目（子どもが評定）。②祖父母世代の受容的養育態度：①の文末を過去形に修正した15項目（以下全て親が評定）。③配偶者の受容的態度：福岡・橋本 (1997) の情緒的サポートに関する項目と、松田・鈴木・永田・植村 (1986) や森下・泉本 (1997) の夫婦の親和性に関する項目を参考に作成した10項目。④次世代育成・社会の維持向上へのコミットメント：Van de Water & McAdams (1989) による記述や Ochse & Plug (1986) による「生殖性 対停滞」尺度を参考に独自に作成した15項目。⑤自己耽溺：エリクソンによる自己耽溺に関する記述を元に独自に作成した15項目（以上全て5件法で測定）。⑥親の認知する子どもの心理的特性：「子どもが両親のどちらになついているか」、「子どもの性格が両親のどちらに似ているか」について、(1)自分の方、(2)妻（夫）の方、(3)どちらでもない、(4)わからない、の4つから当てはまるもの1つを選択してもらった。

III. 結果と考察

1. 受容的養育態度の規定因

「祖父母世代の受容的養育態度」や「配偶者からの受容的態度」と「親の受容的養育態度」との相関を調べたところ、母親の受容的養育態度と祖母の受容的養育態度との間に有意な弱い正の相関が、また特に男の子を持つ母親の受容的養育態度と夫の受容的態度との間に有意な弱い正の相関が見られた。前者については、性役割獲得の一つとして同性親の態度に同一化しているとも考えられるが、今回の結果では男子を持つ母親の養育態度は祖父の受容的養育態度との間にも弱い相関に届きそうな相関が見られており、親から受容された経験が安定した情緒を形成し、それを通じて親となってから子どもを受容

することができるという間接的なメカニズムも否定できない。後者については、子どもが中学生ともなると、母親から見た息子に夫が重なり、夫との間の関係性が子どもとの間の関係性に影響すると考えられる。しかし以上については、一部で弱い関連が見られたのみで、親の養育態度は単一の要因によってはわずかにしか説明されず、複数の要因が複合して親の受容的養育態度を規定していることが予想された。今後は複数の要因を同時に検討することが課題であろう。また子どもの要因として取り上げた「子どもが両親のどちらによりなついているか」について、回答により3群（「わからない」の回答は除外）に分けて親の受容的養育態度の平均値を比較したところ、父母共に、「自分の方になついている」「特にどちらになついているということはない」「妻（あるいは夫）の方になついている」の群の順に受容的養育態度の得点が高く、特に子どもが親と同性的場合には、分散分析の多重比較の結果、「自分の方になついている」という親の方が「特にどちらになついているということはない」という親や「妻（あるいは夫）の方になついている」という親よりも受容的養育態度得点有意に高かった。一方向的な親の養育態度も、双方向的な親子間の相互作用から生まれてくることが示され、養育態度の規定因を考える上では、親子間に生じている感情の交流を見ることが最も示唆に富むのではないかと思われた。

2. エリクソンの成人期課題との関連

「自己耽溺」と「受容的養育態度」との相関を求めたところ、父親は子どもが女子の場合のみ、母親は子どものいずれの性別においても、自己耽溺と受容的養育態度との間に有意な弱い負の相関が見出された。子どもは中学生なので直接親の手が掛かる時期は過ぎているが、この時期の子どもは思春期にあって内的に感じやすく不安定であると思われるので、やはり親が自分ばかりではなく子どもにも関心を向け、自分に対する関心と子どもに対する関心のバランスを取ることが重要であるとあらためて示されたといえる。今後は自己耽溺と他の心理的特性との関連を調べ、受容的養育態度の個人差を生むメカニズムや変容方法などを確かめることが課題である。なお「次世代育成・社会の維持向上へのコミットメント」と「受容的養育態度」との間に今回は関連が見出せなかったが、前者は独自に作成した尺度で問題点が多く、両者の関係については本研究からは結論できない。